

黎明期の洋装とミシンについて (第4報)

——明治の女子教育と裁縫教育——

尾 中 明 代

On Western Style Clothes and Sewing Machines
of Their Early Period in Japan (Part 4)

Education for Women and Needlework

Haruyo ONAKA

As the introduction of Western culture into Japan came to be remarkably flourishing with the Restoration of 1868, the general public gradually advocated the equality of educational opportunity based on the new ideas of equality of man and that of sexes.

In 1872, they enacted the educational system by means of which not only the objective of the compulsory education was established but also the school education was arranged thoroughly. In addition to government and public schools a large number of private schools were founded in Japan.

On the other hand, Christian missionaries who were dispatched from their countries to Japan rendered great services to the school education of Japan in the fields of language teaching, literature and other courses of study.

Then they found a new meaning in the necessity of the education of women, too; and that paved the way for the establishment of girls' high schools where the introduction of needlework art gradually came to be diffused. And it gave rise to a new course of study, namely, dressmaking. Thus what was founded in the cradle years of modern Japan led her to make great strides in the higher education of women.

緒 言

前回では洋装がわが国にとり入れられるようになってからいかにしてその服装が今日に至ったかについて述べたのであるが、明治になって女子の教育もまたその黎明期を迎えることになった。新政府は学制の改革に着手し明治4年に文部省を新設して翌年学制を制定し、児童については小学の部において義務教育の方針を定めた。すなわち尋常小学の在学は6歳から13歳までの8か年を学齢とし、上等下等に分ちら男女子とも必ず卒業すべきものとした。以来たびたび補正、改革を行ない19年には帝国大学令、ついで小学校令、中学校令、師範学校令の公布および諸学校通則を制定してその系統を正した。これにより民間に私立学校の設立されるものも多くなり、一方においてキリスト教宣教師の来日するものも次第に教を増して男子校、女子校に教師として招かれた。明治2年には在日外国宣教師は13名にすぎなかったが6年には55名、12年には120名を数えるようになり、

宣教師としての任務を兼ねつつ欧米の語学のほか各教科の教授に当り、文化の向上に寄与するところが少なくなかった。こうした時代にあっていまだ教育は男子が優先し、女子の教育は立ちおくれの形で種々困難を伴いながらも識者の啓蒙によって次第にその必要性を認められ、女学校設立の気運も高められるようになっていった。これにあわせて裁縫手芸等の技術教育が次第に普及するようになり、洋服裁縫もまた教科として履修されるようになったもので、やがて今日のように女子教育の普及とともに家政学としてその隆昌をみるに至った。今その初期における過程を顧みようとするものである。

本 論

I 明治初年の女子教育観

士農工商の階級制度がきびしかった封建制の社会の下では、士分を除く一般庶民の教育の場としては、わずかに寺子屋、家塾などに通って読み書きそろばんまた子女は針仕事の手ほどきを受けるぐらいのものであった。上流階級の婦女子は家庭で読書 習字 和歌 女礼 弾琴 生花 点茶などを教え込まれることはあったが、それは身だしなみとしてであって、忍従を婦徳とし一段と低い地位に置かれた当時の女子の因襲を越えるものではなく、今日にいう教育とはほど遠いものであった。明治元年、新政府は学制の改革に着手し、3年2月には大中小学の学則6条を制定して、「学校は斯道を講じて実用を天下国家に施す所の者なり」として家の倫理、治国の道、古今の学問を究めるべきことを述べている。一般庶民の間にも次第に四民平等の観念がめざめて、女子の地位も少しずつ前進する傾向がみられるようになり、福沢諭吉の「学問のすゝめ」などの著書は広く人々の間に影響するところがあって、太政官から文部省への通達文の一部にも「一般の女子、男子と等しく教育を被らしむべき事」として女子を含めて教育の機会均等が具体的に考えられる気運が熟した。明治5年の学制頒布に先だって出された太政官布告文には「(前略)自今以後一般の人民(華士族農工商及婦女子)必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す 人の父兄たるもの宜しく此意を体認し其愛育の情を厚くし其子弟をして必ず学に従事せしめざるべからざるものなり(中略)幼童の子弟は男女の別なく小学に従事せしめざるものはその父兄の越度たるべきこと(後略)」として義務教育の方針が述べられてある。しかし旧時代の風習が急に改まるものでなく女子の就学、出席はきわめて不良で、就学率は男子の半ばに達しなかった。明治6年から23年に至る男女別の就学率をみると、6年男子39.9%女子15.1%、12年男子58.2%女子22.6%、19年男子62.0%女子29.0%、23年男子65.1%女子31.1%である。また、小学課程において男女共学を認めた学制にあっては特に女子の教育についてのとりきめはなかった。ただ尋常小学科に手芸を加えた女児小学というのがみられたにすぎず、当時の教育政策としてはいまだやむを得ないことであって、女子教育という課題の進展をみるに至るにはなお後述のような過程をたどることになる。

学制頒布にさいして時の駐米公使森有礼は日本の教育政策についての意見を米国の知名人に求め13名から返書を寄せられたが、そのひとりラトガース・カレッジの数学教授 David Murray が招かれて翌6年来日し、文部省学監に就任した。彼は数回にわたって女子教育の必要なことおよび女教師養成問題について意見書を文部省に提出した。次の文は明治6年12月に文部少輔田中不二麿にあてたものの抜萃である。

「(前略) 児童の幼稚にして心志移り易きのときに当て、之をよく教育するは必ず婦人に在り 婦人の児童に於るに於るに学事を教ふるのみならずその一言一行皆児童の模範となるものなれば 国家後来の人をして必善良ならしめんと欲せば先其母の教育をして此位置にいたらしむるを要す(中略) 今

帝国の各地を見るに既に女子を教育するの公私学校あり（中略）而して今日この校の生徒は独り通学生に止るを以てその来学する者亦近隣の者に過ぎず 宜く此校地と建築とを大にし以て四方の女子をして之に寄宿せしむべし（後略）」また女教師養成については「欧米諸国に於ては女子は常に児童を教授する最良の教師なれば希くは日本に於ても亦女子を以て教育進歩の媒と為さんことを（中略）然れども婦女をして其教授に適せしめんと欲せば必先之を教育せざる可らず 是れ既に欧米に其功を奏する所なり（後略）」とある。

以上のように新しい教育の思潮、制度が整いつつあるなかにおいて、また女子の教育についても広く意を用いられたことがみられる。以下東京を中心として、女子の学校がどのようなものであったか当時の状況をみるとともに、裁縫科教育が女子教育に必須なものとしていつごろから特に注目され、また洋服裁縫の教科がどのように発展してきたかをみたいと思う。

II 女子の官公立学校

(1) 最初の官立女子学校の設立

学制頒布より半年早く明治5年2月に官立の東京女学校が開校された。これが官立女学校のはじめのもので一般には竹橋女学校とよばれていた。開校に先だてて出された文部省の布達文には「人々その家業を昌んにし是を能く保つ所以の者は男女を論ぜず各其職分を知るによれり 今男子の学校は設あれども女子の教は未だ備はず故に今般西洋の女教師を雇い共立の女学校相開き華族より平民にいたる迄授業料を出し候はば入校差許候間志願の者は向申正月十五日迄当省へ可願出事」とあり、入学の年齢は8歳から15歳までとしている。女学校入門心得には授業料は毎月金貳両、稽古時間は毎日5時間、修業年限は6か年としてあった。ここでいう女学校という名称は今日の女学校とは異なったもので、男女共学が認められた官立の小学校に対し、女生徒のみの官立施設のものを女学校と称したのであった。この東京女学校は8年に教則を改め、入学資格を小学校卒業の女子で年齢14歳以上17歳以下の者とし、修業年限を6か年とした。教科内容は相当に高い程度まで進められるようになっており、外国人女教師による英学が加えられていた。このことは将来女子の中等教育機関とするよう企画されていたとみられる。卒業者は大学入学資格者（当時は中学校卒業者）と同等の学力を備えることを企図されたものであって、教科中には「女子をして外国人と語を通じ博学明識のものと相交り見聞を広大ならしむるを要するなり」としるされている。しかし官立最初のこの学校は西南戦争の起った明治10年2月に予算削減のため廃校のやむなきに至ったので、生徒の希望者60名を後述の東京女子師範学校に移した。

官立女学校としてはこのほかに開拓使女学校が芝増上寺山内に同じ年に設けられたが、この方は東京女学校より1年早く9年に廃校になっている。この2校については技芸に関する科目はみあたらなかった。

(2) 師範学校の設立

新政府となって国民教育制度を実施するにあたり、小学校教員養成を急務として早くより企画されていたが、明治5年に男子の師範学校を湯島の昌平饗跡に開いた。また明治8年11月に女教師養成校として官立の東京女子師範学校が神田宮本町に開校され、もっぱら女教員の養成に当たった。のちに東京師範学校と合併して女子部となったが23年3月に再び分離して女子高等師範学校と称した。これが今日のお茶の水女子大学である。東京女子師範学校の開校以後、地方では12年までの間に県立の女子師範学校が次のように設立された。明治8年から12年までに石川県第一第二第三の女子師範学校が、同11年には弘前、千葉、高知、山梨、松江、鹿児島、徳島に、同12年には岐阜に各

女子師範学校が設けられている。

(3) 高等女学校の設立

明治28年に文部省から出された高等女学校規程に関する説明に、女子に必要な高等の普通教育を施す所、とあって、必修科の学科目中裁縫科は1学年から各年とも週5時間ずつがおかれ、さらに上級学年において家事（衣食住、家事衛生、家計簿記、育児）が週1時間課せられている。同32年に従来の高等女学校規程を改めて、あらたに高等女学校令が公布され、ここにおいて女子中等教育機関は内容も整備されることとなり、従来中学校の種類に定められていたものが独立の学校令を持つこととなった。

東京における公立学校としてはこの制定以前、21年に東京府女学校が設立されていたものをこの時に東京府立第一高等女学校と称し、翌33年に新設されたものが第二と呼ばれ、35年には第三高等女学校が設立されている。

III ミッションスクールと女子教育

日米通商条約調印の翌年安政6年にはアメリカのプロテスタント各派をはじめとして、イギリス、カナダ、オランダ等各国のキリスト教宣教師が来日しているが、当時はいまだキリシタン禁制の時代であったので布教は行なわず、日本語を研究するかたわら日本人に英語を教えた。これが日本の近代教育の先駆となってミッションスクールの基礎を作り、欧米婦人による英語教育を通してキリスト教を基盤とする欧米の新しい知識が日本の女子の間にうえつけられ、女子教育の向上に大きな役割を果たすこととなった。

東京での女子教育施設として古いものに明治3年築地の居留地に米人宣教師 Mrs. Carrothers によって小規模な女塾として開かれたA六番女学校がある。当時の教授内容はリーダーのほか万国史 万国地理 植物 天文などでいずれも英語によっていた。この学校はのちに Miss Youngman によって開かれていたB六番女学校に統合され、さらに明治9年には築地新栄町に移って新栄女学校と改称され、23年に桜井女学校と統合されて今日の女子学院となったものである。6年にキリスト教禁制が解かれてからは布教とともに教育活動も次第に活発となり、日本の私立学校設立に先だって小規模ながらミッション系の諸学校が開かれている。明治初期におけるこれら東京の学校をとりあげてみると、7年に Miss Schoonmaker と津田仙（梅子の父）らによって女子小学校が作られ、当初は私宅や寺を教室としていたが、10年に築地明石町に新校舎を造り海岸女学校と改称した。のち28年に青山女学院のもとに統合され、現在の青山学院女子部となった。8年に Miss Kidder らによって開かれた学校はこの名にちなんで13年に喜田英和女学校と称した。18年に駿台英和女学校と改称し大正12年まで続けられた。10年に立教女学校（現在の立教女学院）、17年に創立者 Miss Cartmell によって東洋英和女学校（現在の東洋英和女学院）が設立されており、いずれも短期大学部を設けた学校として今日に至っている。20年ごろまでは宣教師らによる教育活動の最も盛んな時期であった。

これらの学校における教科目は学校によって異なるが、修身 和漢文学 英文学 算術 地理 歴史 経済のほか、中には家政経済 裁縫などを教科目に入れたところもあった。

カトリック系の女子教育施設は、明治22年以後に女子の学校が設立されている。

IV 初期の私立学校

明治初期においては学制頒布ののちも特に女子教育についての定めはなく、小規模な私立学校もかなりあったが、その教科の内容や程度はまちまちのものであった。東京の私学明細簿によれば、明治10年4月から6月現在の東京旧朱引内（東京市街地と郡部とを区別したもの）の男子校と女子

校を含めた私学の学校数および生徒数は次のようである。学校総数 793 校、生徒総数 23,502 名、このうち女生徒数は 12,387 名である。以上のうち共学の学校（但し女生徒 30～150 名の学校）は 222 校で、女子のみの学校は 14 校とある。共学の学校の教科内容については、164 校は学制による下等小学校、10 校は下等・上等の小学校程度で、他は習字を中心とするものであった。これらの学校のうち女子校における教科内容にはかなり高いものがあり、英語学をはじめ 和英習字 漢学 洋算 国学 修身 図画 音楽などのほか学校によっては史学 地学 幾何学 博物学 化学 生理学なども行なわれた。これらの女学校のうち明治 6 年から 10 年までの間に設立されたものに次のような学校があった。（設立年次順、数字は生徒数を示す）水交女塾（星野康斉 7 ほか男 5）知新塾（篠田雲鳳 20）女紅学舎（千代田清右衛門 11）跡見女学校（跡見花露 80）三浦女学校（三浦徹 7）河村女学校（河村シゲ 35）桜井女学校（桜井ちか 15 ほか男 2）中尾女学校（中尾梅 18 ほか男 3）原女学校（原胤昭 23）村上女学校（村上瑛）恒徳女学校（宮原金矢 25）加藤女学校（加藤錦）上記の学校にはミッション所属の宣教師を教師として迎えたキリスト教主義によったものが含まれている。これらの学校のうちには現存しているものもあり、また廃校のやむなきにいたったものもあって、経営上困難の伴ったことが想像される。

上記の学校のうち裁縫が課せられていたものは約半数であった。なかで洋服裁縫を課したものに中尾女学校がある。出願人中尾梅は横浜で米国人女教師ピヤールソンについて 3 年裁縫その他を学んだとある。また桜井女学校は家庭経済 家事管理などの科目もあって家政教育の面にも意を用いていたことがみられる。

V 女子教育と裁縫

(1) 裁縫科教育の必要性

以上のように女子教育の内容が次第に高度なものとなるにつれて、従来女子のたしなみとして最も大切とされた裁縫手芸などは女子教育の初歩的なものとして軽視されるようになってきたので、その反省から再び裁縫手芸が女子に必要なものとしてかえりみられるようになった。明治 25 年であるが、福沢諭吉が女子教育について次のように論じており、当時の裁縫科教育の一端がうかがえるものである。「(前略) その教育法を見れば西洋の文明法を称して主眼とする処 動もすれば学問の一方に傾き教授科目の如き頗る高尚にして却てわが日本女子の為に其固有の美風をそこなふの恐れなきに非ず その一例を云はんは古来我国の女流に最も重んずる所のものは裁縫の一事にして (中略) 近來の女生徒中には博く文明の学問に達し万事万端その道にかけては抜目なきも 衣裳裁縫の一事に至りては更に心掛なきのみか甚だしきは針持つ術さへ弁へざる者ありと云ふ 教育法の一方に偏りたる弊害といふの外なし此事に就いては一時世間の注意する所となり学校に於ても大抵裁縫科を設けたるよしなれども (中略) 科目に其名あるも実際に其实を等閑に附するこそ是非なき次第なれ (中略) 女子の為に謀りて裁縫の事を後にするは教育の緩急軽重を誤るのみならず文明の本意に背くものと云ふ可 (後略)」

なお明治 26 年 7 月 22 日付で次のような文部省訓令が出されている。「普通教育の必要は男女に於て差別あることなく且女子の教育は将来家庭教育に至大の関係を有するものなり (中略) 女子の為にその教科を益々実用に近切ならしめざるべからず裁縫は女子の生活に於て最も必要なるものなり故に地方の情況に依り成るべく小学校の教科目に裁縫を加ふるを要す (後略)」とある。なお同日付にて高等小学専科教員の試験科目に裁縫を増加している。また高等女学校規程については前述 (3) のように 28 年に文部省から出されている。

(2) 和洋裁縫伝習所

以上のように女子教育には学問に関する教科にあわせて裁縫教育もまた大切なものであることが示されているが、これより先明治14年渡辺辰五郎創立の和洋裁縫伝習所（のちに東京裁縫女学校渡辺女学校となり現在の東京家政大学）をはじめとしてこの種の学校が次第に設立されるようになる。ここで思い合わせてみれば、明治36年に渡辺女学校の校歌として制定されたものがあった。これは文学博士小杉楯郎によって作詞され、その内容は女子の裁縫教育を通して婦徳の修養が大切であることを示したもので歌詞は「1. 文読むわざはもとよりなれどおみなとしてはまず針仕事、その針仕事をやよ学べ乙女子この渡辺の教えの庭に 2. 運ぶ針目やとる物差の直くなる道をみなたどれかし」今日この歌詞をみるとき時代の流れ、現代との隔たりを強く感じるのであるが、また前述のような当時の風潮をしのぶときむしろ興味深くその意味と教育の精神が理解できるのではあるまいか。

ここで少し和洋裁縫伝習所および創立者渡辺辰五郎の教育について述べてみたい。氏は青年のころ志して日本橋の裁縫師の門に入り、かたわら読書 習字 算術等を学んだ。郷里千葉県小学校に裁縫科が設けられるにおよんでその教授に当り、わが国における女子職業教育の先導者として教授法に新しい工夫を加え、始めて裁縫の一斉教授を行なった。また授業には教授用掛図を用いたのであるが、これは千葉県庁を経て文部省に提出の上教育博物館に陳列して公表されその名は各地に知られるに至った。明治13年千葉県立師範学校女子部の裁縫科教員として迎えられ、同14年に東京女子師範学校裁縫科の教授を囑託せられた。これとともに同年4月本郷区東竹町に私塾を開き和洋裁縫伝習所と称した。明治13年、14年出版の普通裁縫教授書ならびに普通裁縫算術書（図1）は最も

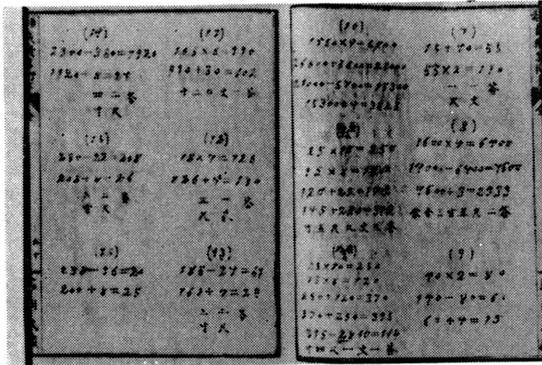


図 1

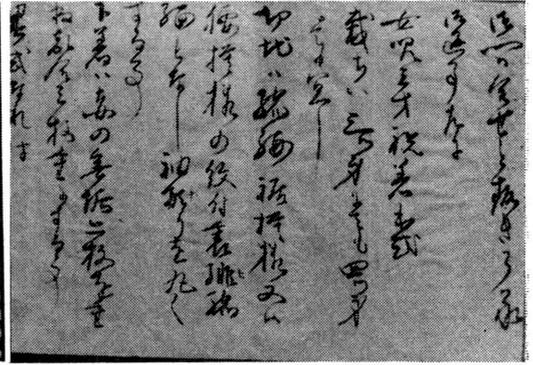


図 2



図 3

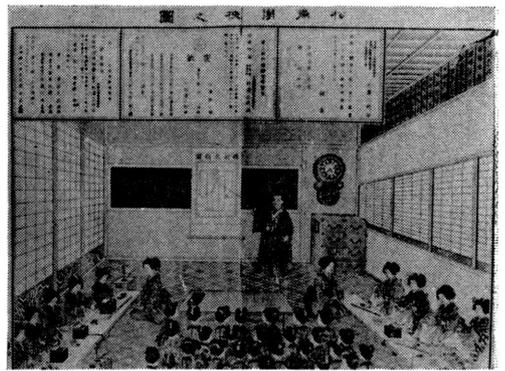


図 4

新しい方法として全国に普及されたが、裁縫技術に算術を始めて応用したものである。のち19年2月に東京女子師範学校を辞して、服部一三を学校長として発起人数氏とともに共立女子職業学校の創立に当たった。29年にこの職を辞して以後は和洋裁縫伝習所の経営に専念し、その組織を改め東京裁縫女学校と改称することになった。当時の学科目は和洋裁縫 礼法 点茶 生花 造花 刺繡のほかに修身 教育 家事 習字を加えて裁縫教員養成の素地を作った。41年に高等師範科を設け、44年に中等学校裁縫科教員の資格が無試験で与えられることになり、これは私立学校に認可された最初である。

2 図は渡辺校長が生徒の質問に答えた手紙（本学資料室所蔵）であるが、懇切な教えと生徒に対する深い愛情がうかがえる。

ここに参考として一般のお針の稽古と、仙台の朴沢裁縫学校の一斉教授の絵を示した。（3・4 図）

(3) 家政系の学校

時代の要求とともに一般学科目のほかに和洋服裁縫、手芸および家政関係科目を主とした学校が次第に設立されるようになった。前述の渡辺女学校以外に次の数校をとりあげて設立当初に於る技術関係科目の内容をみたいと思う。

桃夭女塾 明治14年下田歌子によって設立され上流家庭の子女の教育の場として開かれたもので、科目は国文 漢学 修身 習字などであった。18年に学習院女子部が分離して華族女学校が成立するにさいして下田歌子も参画し、桃夭女塾は廃校届が出されたが、生徒約60名は華族女学校に編入された。32年に実践女学校・女子工芸学校が再び下田歌子によって設立されたのであった。女子工芸学校では実学 技芸を教授し、裁縫科を充実させて自活の道を学ばせることを方針とした。41年に実践女学校と女子工芸学校は合併し、やがて今日の実践女子大学への道を歩むこととなる。

共立女子職業学校（共立女子大学）明治19年に設立され女子に適応する裁縫手芸等の諸職業を授けるのを目的として出発したものであった。当初の科目は裁縫 編物 刺繡 造花を主要科目とし、実践勤労の教育精神を涵養した。37年には術科として前記科目のほかに図画をおき、学科として修身 国語 算術 家事 理科を課した。当時の裁縫科目の内容は、小裁 中裁 本裁衣服 シャツ ズボン下 子供服ならびに婦人服およびその附属品等とある。

和洋裁縫女学校（和洋女子大学）明治30年創立者堀越千代によって設立されたもので実科教育を主眼とし、当初より洋服裁縫を学校教育の中にとり入れたのを特色とした。35年における科目は裁縫科のほかに修身 数学 国語 家事などがあつた。創立者は早くから洋服裁縫についての勉強を志し、明治17年より4か年の間井上慶二郎について英米式洋服裁縫を修め、また20年より3年間三越女子洋服裁縫部に入りフランス人ホフマンについてフランス式洋服裁縫を、また横浜のドイツ人について男子服を学び、新しい裁縫教育を行なった。

戸板裁縫女学校（戸板女子短期大学）明治35年創立者戸板関子によって設立され早くから洋服裁縫を教科にとり入れて迅速な技術の修得を中心とした教育を行なった。

(4) 洋服裁縫を主とした学校

洋服裁縫を教授する学校があつたが、これらは裁縫だけのものではなく、英語 家政 音楽その他の学科等も教授されていて、生徒数は50名から100名ぐらいであった。明治20年から22年ごろ設立されたものに次のような学校がある。女範学校 女子経世学校 東京女子手芸学校 婦人洋服裁縫女学校 洋服裁縫女学館 洋服裁縫女学校 東京裁縫館 哲女館などがみられる。教師のうちには宣教師も招かれていたが、洋服裁縫の技術がまだ普及していない時代では日本人教師の多くは欧米人について勉強したようである。例えば女子経世学校長大橋花の履歴によると、明治11年ワシン

トンに留学し、英文学 編物レース 裁縫 料理 礼式を修業すとある。また東京女子手芸学校教員平田玉子の略歴によれば、明治8年サンフランシスコへ渡航修業の上、11年から21年までミスベールにつき洋服裁縫術全部を研究というものなどがみられる。洋装はまだ一般化されてはいなかったが、鹿鳴館時代をうたわれたこの時代に洋服裁縫を教授する学校がかなりあったことは興味がある。

VI 洋服の裁縫書

裁縫の教科書などは明治初期においてもかなり出版されているが、この中から洋服裁縫に関する書物をいくつかここに紹介してみよう。改服裁縫初心伝（勝山力松蔵板）明治7年版の石版刷で男子洋服裁縫を紹介したもの、5図は表紙であってミシンの画が描かれているが、これは第一回内国勧業博覧会に今井又三郎が裁縫機械（みしん）として出品した環縫ミシン（今日のチェインステッチミシン）の図と同じ形に描かれている。本書を始め以下の書物はいずれも寸法が尺寸によって示されている。つぎの書物は明治20年の版によるもので、男女西洋服裁縫独案内（大家松之助編集）男女洋服裁縫独案内（森兼二郎編著）は婦人服の各種スタイルが多く紹介されている。男女服装西洋裁縫指南（公立中和学校裁縫教師正木安子著）6図は男女服装の図であるが、婦人服には鹿鳴館時代の



図 5

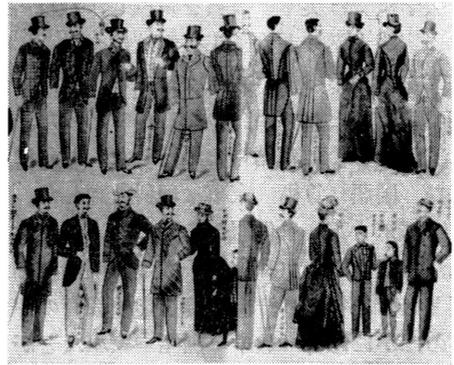


図 6

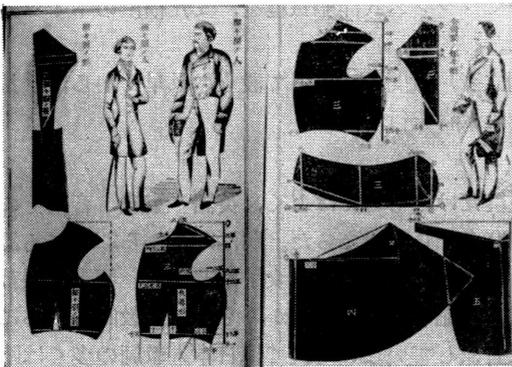


図 7

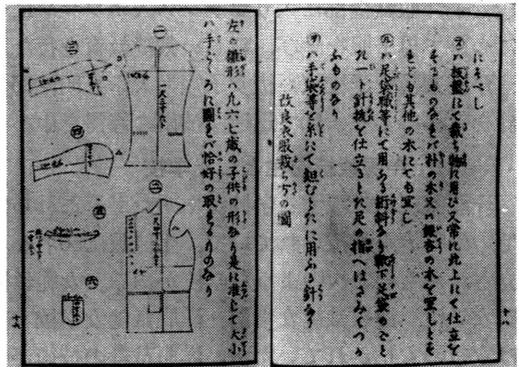


図 8

Bustle Style が描かれている。西洋裁縫教授書（原田新次郎訳）男子服の専門書で外国図書の図を用いて説明されている（7図）。ほかに和洋服裁縫を一冊にまとめた教科書のうちから次のものをあげると、女子必要普通裁縫書（中尾宗七編集）明治16年版。小学生徒改良衣服裁縫伝全附夏冬帽子靴下足袋手袋造り方（平松幾子校閲久永廉蔵編集）19年版（8図）などがある。

これらの書物を開くと、独習書とうたったものでも今日のような製図方法などの詳しい説明はみあたらない。多くは型紙の各部に寸法を記入したものが主であって、こうした時代に洋服裁縫の勉強をするためには並々ならぬ苦心のあったことが推測される。婦人の洋装が一部の人々の間にとり入れられ始めた時代であって、その裁縫技術においても萌芽の時期ではあり、教育界にある人々が新しい方法を研究し指導に当たったことを思うとき、これらの書物を手にして敬意を覚えるものである。

結 語

明治初期における女子教育の発祥とともに裁縫教育発展の過程を顧みだが、いずれも当時の教育者の苦心と教育に対する熱情をうかがい知ることができる。女子は古くから家長中心の封建的な家族構成の中にあって忍従の教えに従っていたのであったが、自由平等の思想とともに女子の教育も次第に普及され、自主独立の精神もまた女子の間にうえつけられたものと思われる。この時代に勉強した女性が私立学校を設立し、今日隆盛をみているものもあまた数えることができる。将来における女子教育の向上を更に考えこれにあわせて生活技術の面においてもいっそうの研鑽を重ねたいとねがうものである。

学校の沿革等の資料については各学校からの御厚意によるもので、ここに厚く謝意をのべたいと思います。

参 考 文 献

学制八十年史	文部省
明治以降教育制度発達史	教育資料調査会
文化大年表	日置昌一
明治編年史	財政経済学会
福沢論吉全集	慶応義塾
大日本全史	大森金五郎
日本女史教育史	志賀匡一
明治事物起原	石井研堂